



安部 光壹
Kouichi Abe

石光真清の4部作

「城下の人」「曠野の花」「望郷の歌」「誰のために」を読んで、戦争と歴史と人生について考える。

1. はじめに

石光真清の4部作（「城下の人」、「曠野の花」、「望郷の歌」、「誰のために」）は、彼が生きた明治、大正、昭和のうち特に、明治の戦争を彼の生い立ちに従い小説風に書かれたものである。

内容は、普通の庶民の生活や軍隊生活が書かれているかと思いつつ読むと、総理大臣、陸軍大将などが実名で出てきて、平凡な個人小説なのか、歴史小説なのか、はたまたノンフィクションなのか、見当がつかなくなる。

しかし、読み終わると今まで知っていると思い込んでいた戦争と現実の戦争のギャップに衝撃が走り、自分の考えていた歴史上の出来事が違って見えてくる。それは、大きく言えば、今の日本の在り方の評価替えであり、歴史とはだれが作るのかという新鮮な疑問の芽生えでもある。

この4部作を読みはじめて読了するのに半年かかった。辛く、面倒くさくもあり、逆にワクワクする部分もあった。しかし、この4部作は、間違いなく、一生に一度は読むべき本であると思う。私は、この苦悩、葛藤の証としてこの感想文を書くことにした。

2. 主人公「石光真清」

石光真清（以下、真清という）は、明治元年に熊本に生まれ、昭和17年（1942年）に亡くなった。この第1部は、その約70年に渡る生涯のうち、幼少期の熊本での15年間に起こった出来事（神風連の乱、西南戦争等）、上京してからの幼年学校、陸軍士官学校、日清戦争に中尉として台湾に出撃したときの出来事を描いている。

真清は、体験した神風連、西南の役、日清戦争を、客観的資料を引用したり、裏付けを取りながら書いているのではない。自分の見聞きしたものとして書いている。

また、真清は歴史的出来事の中に、身内の結婚や離婚、死別、就職などの事情を歴史的イベントと同じレベルで書かれており、読者にとっては、どれが重要な事実かつかめない。だから、

どのようにこの小説が展開していくかさっぱりわからない。

その展開があまりに読者の予想を裏切るので、読者としては1頁先の展開が読めないのである。それがあまりに面白い。なぜこんなに混乱するかというと、明治時代の倫理観を本当に我々が分かっていないこと、小説というのは主役があり、ヒーローがあり、正義の味方があり、善玉、悪玉があるように思いがちであるが、この小説は、そもそも、善玉悪玉を区別せず、さらに、真清より面白い人達がたくさん出てくるからだと思われる。

3. 4部作を通しての問題意識

混乱したままの私の頭では、今回まず1部作の紹介だけにとどめるが4部作全体を通してこの小説全体の印象を述べる。

- (1) 本書は戦争の実態について深く考えさせられる。戦争はなぜ起こるのか、戦争は誰が起こすのか、戦争で人が死ぬことについての意味、戦争の仕方、戦争で死ぬ人、戦争を指揮する人は戦争をどう考えているのか、戦争に勝つというのはどういう状態、意味なのか？日本は平和を好む国なのかどうか等、初めて戦争を生々しく感じ、それゆえに初めて抱く疑問が続々と出てくる。
- (2) 明治維新によって、日本人はその価値観の変動をどのように受け止めたのか
- (3) 明治時代の愛国心とは何か。愛国心と戦争に従軍するとの関係はどうなっているのか。
- (4) 明治時代の女性の地位（妻として、母として、子守として、寡婦として、女郎として）は弱かったのか、女性たちの振舞の根底にあるものは何か。
- (5) こんな大雑把な感想を持ったが、それではまずは1作目「城下の人」から見よう。

4. 城下の人

まずは後掲の年表、人物関係図を参考にしながら読んでいただきたい。以下の頁数は「城下の人」の本の頁を示す。

(1) 母、守家の愛。

主人公、真清は、明治元年熊本に生まれた。明治元年なので、明治の年号が真清の年齢を表すので分かり易い。

真清は7人の兄弟姉妹のもとで生まれ、典型的な家族的、儒教的な家庭で育った。誰からもかわいがられ、子守のミサの愛情も深かった。

真清は病弱であり、4歳の時、当時の医療ではお手上げというジフテリアに罹った(9頁)。喉が収縮し息ができなくなるのである。真清はもがく力もなく脈拍も減り、呼吸もあるが失神の状態になった時、8ヶ月の身重になっていた母(守家)は、安静にしておかなければならないのに、真清を抱寝して食事もないままも幾日も雑飯で済ませた。ところがある日、母は何を考えたか、父が大切にしていた硯箱から筆を取り出し、筆の毛をむしり取り竹の軸ばかりにしてそれ

を真清の口へ差し込み、一方を自分の口に咥えて真清の咽喉に詰まっている痰を自分の口へ吸い取った。臨終の瀬戸際にあった真清は、痰を取り除かれると幾分か呼吸をするようになり、あるかないかの脈拍も多少力が増してきた。真清が息を吹き返したのに力を得た母は、更に筆の軸を口に咥えて真清の咽喉の痰を吸い続けた。何回か繰り返されるうちに、真清は唇をピクピクさせ、その後、手を動かし、身体を動かし始めた。父はその都度驚き、涙を流して喜んだ（10頁）。母は、驚きもせず喜びもせず黙々と真清を抱き寝したまま、様子を見ては筆の軸を咥えて真清の痰を吸い続けた。そして、昼夜一睡もしないで母は続けた。

このような母の深い愛情のエピソードが述べられ、真清は「自分の生命は偉大な母性愛によって継ぎえたのである。その恩愛の深さ、高さ、ただただ涙がこぼれるばかり」と述懐している（11頁）。

この母親の敬愛の深さが、この4部作全体の石光の精神的支柱になっている。そして、このことは単に母親だけに限らず、真清の女性、そして人間、国家への愛情のバックボーンになっている。

(2) 文明開化を庶民はどう受け止めたか。

明治時代は、文明開化か旧来思想かの対立があり、歴史は当然の如く文明開化、富国強兵へ進むが、これを一般の市民、国民はどう考えていたかも、この物語は示唆をあえてしている。

真清は子ども（7歳）ながら、武士の子であり、朱鞘の刀を差して、結髪、帯刀派であった。そして歴代天皇の名を暗記するのが日課だった。一方、兄の真澄は、明治4年8月の散髪廃刀令によりいち早く断髪した。

明治9年3月、真清はとうとう父の命令により断髪を命じられた。真清は「自分の散切りの丸腰姿がまるで刀を奪われた捕虜のように惨めに思われて悲しかった。考えてみれば、西洋文化のために意気地なく捕まった捕虜に違いないのである。私は、往来に出るのが恥ずかしく邸内に閉じこもっていた」（37頁）

このように、当時は子どもの目から見ると、西洋文明を取り入れることが自分や日本の姿を見失うのではないかという不安があったようである。この気分は今も全く同様であり、新しい価値観が世の中に取り入れられようとする時には必ず軋轢があり、それを肯定するも否定するも結果論に過ぎないような気がする。

歴史家は歴史の必然を説くが、そうではないという気がするのである。そんな私の感想を援護するように、真清の父真民は次のように言う。

「いつの世にも同じことが繰り返される。時代が動き始めると、初めは同じ思っているものだが、いつかは二つに分かれ、三つに分かれて党を組んで争う。どちらに組するのが損か得か胸算用する者さえ出てくるかと思えば、ただ徒らに感情に走って軽蔑しあう。古いものを嘲っていれば先覚者になったつもりで得々

とする者もあり、新しいものと言えば頭から軽佻浮薄として軽蔑する者も出てくる」(28 頁)

「(神風連の人々は) 洋学をやるお前たちとは学問の種類も違っているし、時代に対する見透しも違うが、日本の伝統を守りながら漸進しようとする神風連の熱意と洋学の知識を取り入れて、早く日本を世界の列強の中に安泰に置こうと心掛けるお前たちと国を思う心には少しも変わりがない」(27 頁)

真民が明治 10 年 9 月に死亡するという時に、石光家の住職円瑞和尚は次のように言う。

「石光さん、あんたは、急進に組せず、保守に堕さず、しかも、しかもそれぞれの必要を理解しておられた。これも新時代の生みの苦しみじゃ。ご心配は御無用。嵐が幾度荒れようとも、日本の国も石光家も、この大樹のようにこの後も末永く繁り栄えますたい。この大樹も幾百年か・・・永い世の移り変わりを見てきたことじゃろうが、何も知らぬげに生い繁っている。人生僅か 50 年、この短い世に逢うて、末世と感じるのは心の迷いじゃ」(169 頁)

これらの言葉から、真清が二つの対立する意見に耳を傾けるというバランス志向と愛国心が強く醸成されていた言ったことが理解される。第 2 巻では、満州での馬賊や女郎という今の日本では違法視される生き方をする人達を真清は好意的に捉えている。その偏見を排した謙虚な態度が本書を含め、4 巻全体に流れている。

(3) 多くの著名人の登場

「城下の人」では、いろんな著名人が真清の身近に現れている。しかし、真清自身は日本史ではほとんど知られていない。だから、この小説自体、真清の創作ではないか思えるほどのギャップがある。

例えば、西南戦争では、真清の知人の源太夫の邸宅に突然、谷干城（後の陸軍少将、学習院長）、樺山資紀中佐（後の台湾総督、内務大臣、文部大臣、白洲正子の祖父）、児玉源太郎少佐（後の台湾総督、満州軍総参謀長）が突然現れて、3 人で奇遇している。いずれも、明治を代表する政治家、軍人である。何で真清がこんな人達と接点があるのかと不思議である。一方、それらと相待持するように真清の家系も華麗である。真清の父の弟の野田豁通は、陸軍大将まで登り詰めた人で、終始真清の出世の後押しをしてくれる人物である。ビール王と言われた人、大阪ガス社長、その他、橋本龍太郎元総理大臣の父、橋本龍伍は真清の甥にあたる（人物関係図参照）が次々と登場する。

2 巻目になるとさらに、明治時代を牽引した著名人がきら星の如く出てくる。例えば、総理大臣となった田中義一は、真清とともにロシア語堪能なエキスパートであり、真清の終始変わらぬバックボーンとなった。ここまで煌びやかな明治の群像に囲まれた人（真清）が今まで知られてなかったとは？ところが、そ

んな思いを抱いていたとき、私としばしば仕事を一緒にしている長崎出身のJ弁護士にこの小説に出てくる人達の名前を言うと、「その軍人の中で、真清の幼年学校の2年先輩で軍神と言われた橘周太（東宮武官、歩兵第36連隊中隊長、名古屋陸軍地方幼年学校長）は私の親戚です。橘中佐は明治37年に日露戦争で死亡しましたが、島原には彼の偉業を称えて橘神社が建立されています。」と言われた。親しい友人からこのように言われると、ますます真清の話が実話であるような気がしてきた。そうすると歴史の生き証人とも言える人の伝記がなぜか我々の目に触れなかったのかと不思議な気持ちになる。

5. 女性の活躍

- (1) 城下の人では、女性が多く登場する。彼女らは決してひ弱でもなく、主体性がないとは決して言えない。男性を引っ張って勇気づけているように、見える。いずれも自分の境遇を自覚し、それを全うしようとしている。

人間は生まれながらに平等とか男女同権とか言い始めたら、彼女らはその虐げられた境遇の中で自分の意思を捨てて生きている弱者と言う評価で切り捨てられる可能性がある。

しかし、前述の守家をはじめ子守のミサ、石光の姉真佐子、石光の従兄の生田登三郎の妻清子らは、実に個性的で男性は歯が立たない。ミサにおいては、真清に対する子守母としての無私的愛、真佐子においては結婚後の直ちの離婚と家族への献身、清子においては結婚後、夫が直ちに従軍して別離となっても生真面目に姑に仕え、夫が戦死したとしても気強に生きていく姿に女性としての強さを感じるのである。

- (2) 特に真清の従兄登三郎の妻、清子は、結婚して5ヶ月の後、夫は東京に行き、熊本の登三郎の両親と同居させられる。登三郎は、官軍につき、西南戦争では田原坂で戦死する。清子はそれでも嫁ぎ先の生田の家にとどまり私はどこまでも生田の家にとどまって夫の両親を守っていく覚悟です（184頁）と妻の鏡のようなことを言う。
- (3) 前述の真清の母守家も夫が明治10年に亡くなった後、一家の経済を支えるための遺産をどしどし田畑に代え、生活は極度に切り詰めて、数々の小作料でさらに土地を買い、南隣の伊佐家、北隣の室部家も買収し、明治17年病気にかかって長男の真澄に財産を譲渡した時は、父の残した財産の十倍に増えていた（172頁）というのである。

この外、真清には第2巻「曠野の花」になると、満州、ロシアにおいて、お花、お君、お米など、女郎という不幸な生い立ちながら馬賊の妻となったり、たくましく生きる女達が登場する。まさに第2巻は曠野の「花」である。これを見ると、真清いや真清に限らず、明治の人々が深く女性を評価していたのではないかという思いがする。

6. 大津事件

この「城下の人」は、真清が上京して幼年学校、陸軍士官学校を卒業して軍人となる明治22年頃から、一気に戦争ムードに突入する。そのきっかけになるのが大津事件である。

明治24年5月12日午前1時、真夜中の近衛師団の兵営に非常ラッパが鳴り渡った(229頁)。前日の11日午前8時30分、滋賀県大津市に警戒中の巡査津田三蔵が日本を旅行中のロシア皇太子(後のニコライ2世)を突然切りつけたのである。その知らせに明治天皇はすぐさま翌日12日午前5時新橋駅発の特別列車にて京都に行幸された(229頁)。

真清はこの状況を述のように述べている。「ロシアは当時、世界最大最強の軍国であり、北欧からウラルを超えて広大な北アジアを侵略し、これを東西に貫く鉄道で結ぶ大事業に取り掛かっていた。このシベリア鉄道起工式に皇帝アレキサンダー3世の御名代として皇太子(ニコライ2世)が出席の途中、日本視察に立ち寄ったのである。軍艦七隻を従え、鹿児島、長崎を経て関西を巡り、さらに東京から青森に向かいウラジオストックに渡る予定になっていた。彼ら一行にとって、日本は一小国というよりも、東方の新領土に接する点々とする一列島にすぎなかったと思われる。人口3,500万人、陸軍6箇師団、海軍は殆ど無いに等しい状態であって彼らの従えてきた軍艦七隻だけでも日本の大脅威だったのである。彼ら一行の目には日本の軍備は七五三のお祝いに軍服を着た鼻たれ小僧に見えたであろう(231頁)。」

「明治天皇は負傷した皇太子を京都の常盤旅館にお見舞いした。ところが、ニコライ皇太子は神戸港から急遽ロシアに帰るといふ。そこで明治天皇はやむなく1時間程旅館でお待ちになり、七条駅の汽車で神戸まで同乗した。そして、神戸の栈橋にニコライ皇太子が立ってポケットから煙草ケースを取り出されると陛下は自分のポケットからマッチを取り出されて、火をつけて皇太子の煙草に近づけた」(237頁)。まあ、日本人にとっては何という屈辱的な光景だろう。明治天皇の切々たる思いと、その時の日本の苦難が手に取るようにわかる風景である。

日本側としては、皇太子一行を天皇御用邸に招待して、送別の宴を開きたいとロシア側に告げていたのである。しかし、ロシア側は治療上の都合で謝絶され、その代わりに19日には陛下に神戸港に停泊しているロシア軍艦に來艦されたい旨、申し出を受けた。日本側は陛下の來艦を受けるべきか否か、黒煙を上げているロシア軍艦はそのまま天皇と皇族を人質としてロシアに連れ去るかも知れない。人質としないまでも艦内でどんな辱めを受け、どんな難題を持ちかけられるかも知れない(238頁)。その状況下で陛下は「申し出をお断りする理由はない。悦んで御招待に応じる。私の一身を以って日本国の危急を救いうるなら

満足である」「お断りするのは無礼である」(238 頁)。と述べたという。然るに艦上での会談は 2 時間で終わり、陛下の無事を国民が知り、埠頭には万歳の声が起こった。ところが、このことを知らぬ千葉出身の 27 歳の女性は陛下の窮地をお察して京都府庁の前で自殺した。この女性は天皇陛下がロシアの軍艦に搭乗されたことを知り、自分の死をもって軍艦から帰ってこられることを希願して自殺したのである(240 頁)。

私は、大津事件と言え、大審院長児島惟謙が司法権の独立を守ったエピソードとしてばかり記憶に残っていたが、それ以上に明治におけるこの事件の重大さが理解できる。国力充実と海外進出に拍車がかかる一方で、後進国たる不安が生々しく描かれている。

7. 真澄と馬越恭平のエピソード

大津事件のエピソードとともに真清は兄真澄と後にビール王といわれた馬越恭平について触れているが、これも面白いので紹介する。

兄真澄は、河野政子(210 頁)、戸田マサ(211 頁)、本田満子(214 頁)と 3 度の結婚をしながらも、母に対する孝心一身の男であったが、それを真澄の上司であった三井物産支店長馬越恭平が恵比寿麦酒(現在サッポロビール)を引き受け再建した時に、一度三井物産を離職した後彼を再雇用した。馬越恭平は日本のビール王と呼ばれた人物である。彼は「これからの事業は御一新前のように個人の手腕、力量だけではやれない。資本と信用と組織だ。けれどもその中で一番大切なものはやはり普通の信用だ。信用だけは買うことも譲ってもらうこともできない」「生まれながらに備わった誠意というものは数万貫の鉱石の中から掘り当てた宝石のように貴い」(241 頁、242 頁)と述べ、真澄を採用したのはこの信用があるからなのだ、と述べている。

ここに真清の人生観がある。銃弾の飛び交うロシア、満州の地に約 40 年間生き延びた男の人生観である。

8. 軍神橘周太の教え

また、真清は、軍神橘周太の言葉の中から次のような言葉を紹介し、4 巻の小説の中で至る所で引用している。「(将校の心得として)、兵汗を拭わざれば拭うべからず。兵休まざれば休むべからず。兵食わざれば食うべからず。兵と難苦を同じ有し劳逸を等しゅうする時は、兵は死を致すものなり。信用は求めるものに非ず、得るものなり…」(249 頁)という。

橘周太はこの文章とおりに行動して、兵と共に戦場に果てた人である。後世軍神に祀られてからは鬼神も泣かしめる勇壮な荒武者のように伝えられてはいるが、伝来の武士道の厳しさと美しさを新しい軍律の中に生かしたいいわゆる新日本の軍人精神の基礎を築いた人であった(249 頁)。

9. 出征

日清戦争が明治27年8月1日に起こり、明治28年3月10日真清に出動命令が出る。真清は、神風連の乱、西南戦争及び軍事訓練で相当に戦争を知っていたと自負していたが、その命令が下ると心臓が高鳴り両足の力が抜けてしまい弱気になり、子守のミサを思い出しては泣き、ついには一睡もできなかったと告白している(261頁)。やはり、将校でも出征するということはこのような気持ちになるのだと感じた。

10. 戦争の仕方、勝つ方法

(1) 日本は明治29年4月17日に下関で台湾と遼東半島を日本に割譲する講和条約を締結したが、一週間後の4月23日、ロシア、ドイツ、フランスの三国干渉に遭い、遼東半島については一方的放棄を余儀なくされた。真清も日本も相当に悔しかったに違いない。臥薪嘗胆という言葉が当時の日本人の合言葉だった。今の日本も、トランプ、北朝鮮問題やいろんな外交問題で蚊帳の外に置かれていると感じる時があるが、この三国干渉だけは当時の日本(人)にとっては最大の悔しさだったことだろう。そして、さらにこのことが海外進出に拍車をかけることになる。真清の出兵はその講和条約後の5月17日、台湾守備命令という名の出兵である。真清はここで初めて青竜刀を振りかざした敵兵を自らの軍刀で刺してとどめを負わせたのである。大変な勇気がいったと思う。この場面は、法律家が登場し、刑法の正当防衛の要件に当てはめれば・・・・・・、などという発想はナンセンスである。裁判と戦争は違う。裁判に負けても命は取られないが、戦に負ければ命がなくなる。憲法や平和を守るというだけでは、領土も家族も自分も守れない。私は、弁護士であるが、法律や憲法だけでは国は守れないと思う。そのような、机上の空論ではなく、実際の戦い方の方法や訓練、心構えは絶対に必要だと思う。

(2) 戦争の中のドラマ

真清の第三中隊は第二連隊長(坂井重孝)の指揮のもとに台北の近くの新竹城の守備に就いた。入城したのが明治29年6月22日であったが、25日の午前1時、四戸友太郎軍曹を枕頭山の下土哨に派遣したところ、午前11時頃、敵兵約500人がその部下を包囲してしまった。そこで真清は兵20名を率いて救援に行き、やっとのことで合流した。真清は敵に小銃を浴びせたが、敵兵は次第に数を増して約1,000名ほどになって、完全に真清を包囲してしまった。殆どが青竜刀や槍を持った兵で、小銃は100丁ほどしかない模様であったが、50倍の敵に包囲されたのでは全滅である。次第に包囲を縮めて50mまでに接近してきたから、真清は退却命令を出し、西門を目指して狂ったように突進した。すると、この時である。「待ってくれ!首を取られる!」という絶叫が後ろから聞こえた。見ると兼氏谷五郎という二等兵が出遅れで窪みの中に取り残されてしまったの

である。「馬鹿野郎！貴様一人のために待てるか。首を取られたら自分で抱えて来い！」私がこう怒鳴って飛び出すと、兼氏二等兵も勇気が出たと見えて、飛び出してきて合流した。妙なもので、50 倍の敵兵が真昼間の戦場で僅か 20 名の我々の勢いに気を吞まれて、呆然と見送ってしまったのである。おかげで一人の負傷者もなく帰還することができた。戦争にはこのようなことが多いものである（283 頁）と真清は述べている。

私は、当然ながら戦争を知らないので、戦争の仕方とはこのように度胸や迫力があるものかと感じたものである（283 頁）。

結局、真清は日清戦争に従軍したことで弟真臣とは金鵄勲章を賜ることになる。（今の勲章と違って相当な謝金を賜るようである。323 頁には、真清は年金 300 円をもらったと書いている。）

しかし、このとき真清は国と国との民族と民族との生きる戦い、子孫のための戦いの激しさを血煙と絶叫の中で実感することになった。

真清は、日本がやがては大ロシア帝国の侵略に脅かされて再び国の運命をかけて戦わなければならない日が来ると感じた。遼東半島の日本への帰属の排除を申し出たロシアは、この地に日本が軍港と陸軍基地を設ければロシアの満州侵略の邪魔になると感じたのである。ますます真清はロシア研究の必要性を強く感じたのである。

11. ロシア留学への道

とうとう城下の人々の最後の章で、真清は明治 32 年 6 月、ロシア留学を決意し軍隊生活を事実上終わり、秘密裏にロシア情報活動を行うことになる（322 頁）。

明治 32 年 8 月 25 日、初めて真清はウラジオストックに足を踏み入れることになる。そして留学先はハバロフスクよりまだ西の黒竜江の要塞地ブラゴヴェヒチェンスクであった。そこは明治 33 年 7 月 16 日、ロシア軍により清人民間人 3,000 人の大虐殺が行われている場所であり、これをきっかけに怒涛のようにロシア軍が全満州に殺到して東亜の大戦乱が始まる。真清はこの模様を歴史が自分を馬賊の群に投げ込み、あるときは女郎衆を友とし、あるときは苦力（クーリー）に、あるときは洗濯夫に、あるときはロシア軍の御用写真屋になって、全満州に辛酸の月日を送ることになると書いている（330 頁）。

「歴史の起伏のうちに漂う身一つは黒竜江に流れる枯葉一葉にも当たらない思いがするのである」という言葉で最終頁を結んでいる。

第 2 巻は、真清が、明治 32 年 8 月 25 日ウラジオストックに日本郵船相模丸から降り立った真清の姿から記述が始まる。肩書は休職の歩兵大尉であり、ロシアへの私費留学を許可された学生としてである。そのトランク一つ携えて船のタラップから降りた姿は、まるで、C I A のジャックライアン（トムクラン

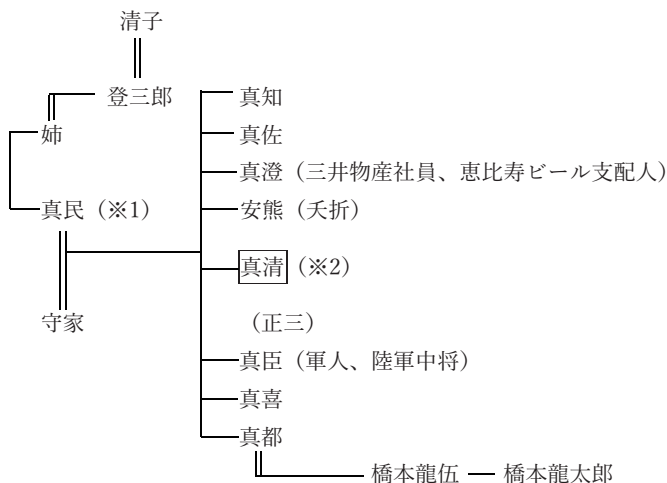
シー、レッドオクトーバーを追え) か、ジェイムズボンドを連想し、

第2巻のトーンを予期させる。第2巻は、スリリングで荒くれである。生きるか死ぬかの戦争の怖さが随所に出てくる。人の命が屁でもないのである。しかし、読み終われば何というかヒューマンな味わいがある。

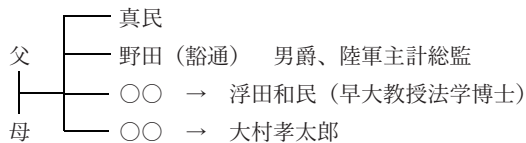
それは第1巻に感動した欲目でいうと、真清の誠実で謙虚な眼、そして女性に対して差別視していない人間としての目が根底にあるからだろうと思う。

また、次のワクワク感溢れる二巻目を期待してください。

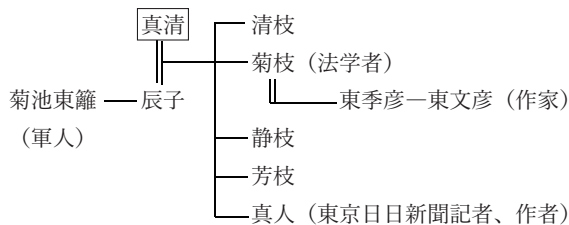
石光真清 人物関係図



※1



※2



① 生田登三郎と清子

真清の父、真民の姉の嫁ぎ先、登三郎の妻が清子。

結婚5ヶ月で登三郎と別居し、生田家に義父母と終生暮らす美人な女性。

② 下村孝太郎

真清の従兄弟、化学者、同志社大学第6代社長、大阪ガス社長。

彼が、京都大学を出て科学技術者になった息子たちに与えた遺訓がある。

「①技術者は、機械にあらず、機械を支配する職なれば、人生を弁じ、人生を支配する能力なかるべからず。

② 世に技術者気質と申す変てこりんのものあり、他人の言うことを聞かぬ性質を指すなり。折々、素人が途方もないことを言い出すことあり、かかる言い分には、技術者の参考として思考の種となるもの無きにしも非ず。

③ 技師は経済の思想なかるべからず。理想的な技師は技術に加うるに営業の才能ある者たるべし。これなき技術者は異種の高等職人にすぎず。」

③ 林田亀太郎

真清の従兄弟、官僚、衆議院議員。

④ 浮田和民

真清の従兄弟、政治学者、同志社大学教授、早稲田大学教授（倫理的帝国主義を標榜し、大隈重信のブレーンと言われる）

⑤ 源太夫とミサ

源太夫は真民の友人で、藩政時代、真民と同じ塾に通った友人。

醸造業を営みミサは真民の家で真清の子守をしたが、その後源太夫のもとで働く。西南戦争の時、谷干城、児玉源太郎、樺山資紀が宿泊した家の主。

⑥ 柴五郎

真清の叔父の野田豁通が、会津若松城が陥落した後、会津藩士の子弟を県庁の給仕として採用した一人。後の陸軍きっての中国通として知られ、義和団の乱の防衛戦で称賛を浴び、日本人の勇敢さと礼儀正しさが世界の注目を集めた。

⑦ 馬越恭平

三井物産に勤務し、真澄のサポーター。大日本麦酒の社長。衆議院議員。日本のビール王と言われた。

石光真清年表

1 明治元年（1868年）8月30日

熊本市本山町に熊本藩士石光真民とその妻守家の四男として生まれる。幼名は忠三、正三。その後、明治16年、真清と改める。

2 明治9年(1876年)3月28日廃刀令

なお、明治4年8月9日に政府は、帯刀、脱刀を自由とする散髪脱刀令を発していた。

3 明治9年(1876年)10月、神風連の乱

廃刀令に抗議して熊本で起こった士族の乱。

4 明治10年(1877年)2月、西南戦争

明治9年に神風連の乱、福岡で秋月の乱、山口で萩の乱という士族の乱のあと、西郷隆盛を中心として、熊本、宮崎、大分、鹿児島で起こった士族の反乱。政府官軍は有栖川宮熾仁親王を総司令官とし、谷干城少将(後の農商務大臣)、樺山資紀中佐(後の海軍大臣、軍令部長、白洲正子の祖父)、児玉源太郎少佐(後の陸軍大臣参謀総乃木希典少佐(後の学習院総長))など、後年の大物軍人、政治家が従軍した。3月1日が熊本の田原坂の戦い。9月24日、西郷隆盛は鹿児島、城山で別府晋介の介錯のもと自刃した。

5 明治10年(1877年)9月19日

父真民が死去。

12月1日日本山小学校に入学。真清の学友に徳富蘆花(作家)、鳥居素川(大阪朝日新聞記者)、元田享一(陸軍中將)、嘉悦敏(陸軍少將)がいた。

6 明治16年(1883年)

上京し、陸軍幼年学校に入学、名を真清と改める。

7 明治19年(1886年)

陸軍士官学校入学。

8 明治22年(1889年)

陸軍士官学校卒業。近衛歩兵第2連隊付(少尉)勤務。

9 明治24年(1891年)5月11日

大津事件に遭遇。

10 明治28年(1895年)

日清戦争で中尉として台湾に出兵。

11 明治29年(1896年)6月1日

台湾、瑞芳という村で初めての戦闘、軍刀を抜き兵隊を殺傷。

12 明治29年(1896年)8月11日

野田豁通は男爵を授けられ、真清と真臣は金鷄勲章功5級と勲六等瑞宝章を賜った。

日清戦争の勝利で台湾と遼東半島が日本に割譲されたが、ロシア、ドイツ、フランスの三国干渉で、その1週間後遼東半島の放棄を宣言させられた。政府は、臥薪嘗胆を説いて軽挙を戒めたが、国民の悲痛は、容易には収まらなかった。

13 明治29年(1896年)11月11日

熊本の菊池東籬の長女辰子と結婚。

14 明治 31 年（1898 年）3 月 31 日

長女清枝生まれる。

15 明治 32 年（1899 年）6 月

真清のロシア私費留学を許可され、軍隊には休職願いを出した。実質は、ロシア満州情報の収集である。当時のロシア通は、村田淳砲兵大佐、田中義一の歩兵少佐（後の総理大臣）、萩野末吉歩兵少佐、花田伸之助歩兵少佐、町田経宇歩兵大尉の 5 名にすぎなかった。

第 2 巻（曠野の花）

16 明治 32 年（1899 年）8 月 25 日、初めてウラジオストックに到着

17 明治 33 年（1900 年）10 月中旬

ブラゴヴェヒチェンクスに到着。菊池正三と名乗る。ロシア名は、セメノフ・イワノウィッチと名乗る。

18 カザック連隊付き騎兵大尉ポポーフに連れられ、愛琿城（ブラゴヴェヒチェンクスを流れる黒竜江の対岸下流の支那街）に入城。

翌 16 日、真清は、お花（水野花）と出会う。宋紀（馬賊）の頭目の愛人。

19 明治 33 年（1900 年）7 月 16 日

ブラゴヴェヒチェンクスの大虐殺。在留清国民間人 3,000 人がロシア軍に殺される。

20 明治 33 年（1900 年）8 月 10 日

船でブラゴヴェヒチェンクスからウラジオストックへ。8 月 15 日ハバロフスクに到着。8 月 16 日午前 5 時、3 等客車に乗ってウラジオストックへ。直ちに町田経宇少佐、武藤信義大尉を訪問。真清は現役に復帰してハルビン行きを命じられる。

21 明治 33 年（1900 年）8 月 17 日

ニコリスクへ向かう。本願寺出張所の安倍道暎を訪ねる。ハバロフスクの東洋館、菅井五郎、お雪と出会う。

22 明治 33 年（1900 年）8 月 30 日

増世策とお君と出会う。趙は増世策の番頭。紀鳳台は増世策の兄貴分。8 月 31 日、ハバロフスクホテルで増世策、お君、趙、真清の 4 人で食事をする。

23 明治 33 年（1900 年）9 月 5 日

ハバロフスクからブラゴヴェヒチェンクスに洗濯屋として乗り込みハルビンに向かう。

24 明治 33 年（1900 年）9 月 14 日

三姓に上陸しハルビンへ。城門の外で 3 人の女郎（豊、楨、米）に出会う。